

『八洲学園大学紀要』第5号掲載論文【抄録】

p.15～23、2009

ルソーの教育思想に対する宗教的観点からのアプローチ(1)  
『エミール』の乳児期における「合自然の教育」に関する一考察

田中 マリア

キーワード：エミール、自然の教育、自己愛、隣人愛、徳の実践

本研究では、『エミール』における「合自然の教育」について、J.J.Rousseau の宗教論、とりわけ第4編『サヴォワ人叙任司祭の信仰告白』との関係に着目しつつ検討を加えた。

ルソーは、乳児期の教育論において「自己保存」を目的とした子どもの衝動や活動を阻害しないことを自然の道にとどまる方法であるとしていたが、それは彼が「自己保存」欲求から生ずる「自己愛」を、「神」が人間に与えた唯一の情念 人が現世において神の意志を果たし「隣人愛」を実践するために必要不可欠な要素 と捉えていたためであり、また、そうした「信仰心」に基づく徳の実践をこそ重視していたためであった。したがって、『エミール』の乳児期において強調される「自己を保存するためには、自己を愛するべきであり、なにものにもまして自己を愛するべきである」というルソーの言葉は単なる個人主義、児童中心主義とは明らかに異なるものであり、ルソーが子どもの衝動や内的自然性を重視する意図はルソーの宗教論とりわけ第4編『サヴォワ人叙任司祭の信仰告白』との関係において把握されるべきであろう。